

03

第3の旅

出雲大社へ 全国の神さまが集合する社

■3 出雲大社は大国主命の社？ スサノオの社？

■ 3-1 神さまの集まる出雲大社へ。大国主神の住まうところ

10月には神無月というが、出雲では全国の神さまが集まるので神在(かみあり)月という。中世になっての俗説というが、出雲の人たちはこの月に全国の神さまが集まって「縁結び」の作業をすると信じている。

「全国の神さまって、天照大神も？」

など野暮なことを大社前のお店の人に聞いてみた。

「さあ、あちこちに居られる八百万の神さまじゃないですか」

とのこと。名前はわからないが、いろいろな神さまなのだろう。出雲大社の社殿脇には八百万の神さまがお泊りになる宿舎もある。

■ 神迎えの道

出雲大社への参拝は国鉄の大社駅から行った。今は旧大社駅の建物は重要文化財になっているが、JR大社線そのものは廃線になった。いま出雲大社への鉄道は一畑(いちばた)電車のみになった。一畑電車の大社駅の前を出雲大社の参道が通っている。駅手前の宇迦橋に大きな一ノ鳥居があり、駅前から坂を上った勢溜(せいだまり)に立派な木の鳥居(二の鳥居)があり、松並木を下ったところに鉄製の三の鳥居があり、さらに銅製の四の鳥居がある。出雲大社では四つの鳥居をくぐってお参りするのが習わしだ。4つは縁起が悪いといわれるが、出雲大社はもともと根の堅州の国(黄泉の国)にある神社だから、4を忌嫌うことはない。さらにしめ縄の巻き方も反対だし、参拝方法も二拝四拍手一拝と他の神社と異なるしきたりが多い。ふつうの神社ではないのだ。



神さまの宿泊する長屋

10月に集まる神さまは、鳥居のある参道を通るのではなく、神さま専用の「神迎えの道」をお通りになる。さっそく神迎え道を歩いてみた。大社の西側には稲佐の浜というきれいな浜辺があり、そこに大岩が屹立している。神さまはこの岩をめざして上陸してこられる。天孫系の神は天のかなたから降臨されるが、日本古来の八百万の神さまは船に乗って海を越えてやってこられる。いわゆる国津神といわれる神々だ。

■ 稲佐の浜の弁天岩

砂浜に屹立する巨岩は弁天岩という。弁天様が祀ってあったからその名がついたが、神仏分離された明治以降トヨタマヒメ(豊玉姫)が祀られている。

「おお、やっと出雲でもヒメが出てきた。」

トヨタマヒメは日本国初代天皇のオバアサン。海の神さまオオヤマズミの娘で、釣り針を探しに竜宮城にやってきた山幸彦と結婚する。その後山幸彦のふるさと日向に戻り、子どもを産む。しかしワニの姿に戻ってお産をする姿を見られたので、子ども(神武天皇のお父さん)を置いて海のかなたに戻ってしまう。この話を信じたら神武



天皇はワニの孫になってしまうが、因幡の白兎のところで考えたように、「ワニ」は海洋民族の和邇氏のことであろう。そのあたりの話はなかなか興味深い。要は日本の皇室の祖先は天の神と海の神との融合によって生まれたことを暗示しているのだろう。

このトヨタマヒメの「豊(トヨ)」という名前はこれから後しばしば出てくる。伊勢神宮外宮(げぐう)の神さまである豊受(トヨウケ)大神と関連があるのではないかと、私は思っている。

それはさておき、弁天岩から東に神迎えの細道を行く。なんだか路地裏を歩く感じで、とても神さまをお迎えするような感じはないが、とにかく神迎え道である。その両側には出雲そばのお店が並んでいる。本日は石見(いわみ)在住の山崎さんと一緒である。彼のすすめる西村屋さんで、とりあえずお参り前に出雲そばをいただくことにした。食べ終わって満足したら、神迎えの道のことを忘れて、勢溜の高みに出てしまった。

■ 出雲人と石見人は犬猿の仲

石見は同じ島根県だが出雲の西側に広がる旧国名だ。出雲人と石見人は仲が悪いといわれる。その原因はるか昔にさかのぼると私は思っている。

▲石見の一宮は浜田市にある物部(もののべ)神社だ。大和の地で権勢を誇った物部氏の故郷は石見なのだ。

▲一方出雲はスサノオの故郷、スサノオは出雲の須我の地に本拠を構えた。出雲一宮の熊野大社で、出雲大社ではない！ その祭神はスサノオ命である。スサノオは須佐とか須我、素我などと書かれることがあるが、蘇我にも通じる。蘇我氏は物部氏の後に勢力を誇った名門で、聖徳太子も一族だった。

△ 日本歴史の時間には仏教を取り入れた蘇我氏とそれに反対した物部氏の間に争いがあり、最後は仏教がとり入れられて物部氏は滅ぼされたとある。

私は石見人と出雲人の仲互いの遠因はこの時の物部氏と蘇我氏の抗争にあるとみ

ているのだが……、まあ真相はまったくわからない。

ところで蘇我氏はその後、日本史上の重大事件「壬申の乱」で蘇我入鹿が藤原鎌足に殺されて滅亡してしまう。後の歴史は藤原氏の創造だから、敵対した蘇我氏は悪者で公式な歴史書、古事記などでは抹殺されている。

私はさらに後の世、すなわち明治政府によって神仏が分離され、廃仏毀釈という悪行が行われたが、この宗教改革の元をたどると、仏教派の蘇我氏と天孫派の物部氏の争いに行きつくのではないかと思う。明治政府の要人は長州、石見の出身が多い。大昔の物部氏の故郷だ。すなわち反仏教勢力、物部氏の末裔が積年の恨みを晴らし、王政を復古し、仏教勢力を叩きだした、と私は見ているのだが。

勢溜(せいだまり)の木の鳥居(二の鳥居)からは眼下に大社駅に続く参道が見え、反対側には松並木が三の鳥居に向かって下がっている。出雲大社に参拝するには鳥居から下にさがっていくのだ。神社というのはたいてい石段などをのぼった上にあることが多いのに、ここは逆だ。天から下ったという意味を持たせたのだろうか。実に不思議な地形利用だ・

■ 3-2 出雲大社は超巨大だった

2013年5月10日、平成の大遷宮が行われた。大国主神が御仮殿から新装なった本殿へ移られる「本殿遷座祭」がおこなわれた。私たちもその日を選んでお参りに来た。といっても氏子でもないので、闇の中を神さまが遷座されるのを見ることはできない。しかしこの日の昼間にはお参りすることはできるので、急ぎ松並木を下って社殿に向かった。参道の両側に提灯がつるされ、砂利がきれいに清められて、着々と準備が進んでいる。境内にはたくさんの椅子が並べられている。夜 7 時に始まる遷座祭には 8000 人が招かれているそうだ。



私たちは「本殿遷座祭」をテレビ中継で見られない。7 時半から NHK で中継すると聞いたので、東京でもぜひ見るように連絡する。後で聞いたら、東京ではニュースではほんのちょっとやっただけ。

東京では「出雲の遷宮」はローカル扱いだ。日本国においては伊勢の遷宮と同じくらい重要な遷宮祭と私は思っていたので、NHK の考え方には少々というか、かなりがっかりした。日本の歴史では、出雲大社や三輪神社は、伊勢神宮よりもはるかに古く由緒もあるのに。

■ 大注連縄がない！

午前中はまだ大国主神が御仮殿におられるのでそちらに参拝する。出雲大社は二礼四拍手一礼が正式の作法だそうだ。ふつうは二拍手だが、それは明治政府が「のぞましい」と決めただけで、それにくみしない神社もあるようだ。

拝礼の前から気が付いていたが、御仮殿には「ありゃ、大注連縄がない……」

注連縄はあるが、前に来た時に記憶していたあの
大注連縄(長さ13.5m、太さ8m、重さ4.4t)あれこそ
が出雲大社を示すものだと思っていたが、それがいないのだから驚いた。あちこちうろ
ろしてみたら、神楽殿には記憶通りの大注連縄があった。

お参りをしている人に聞いてみると、御仮殿から御移りになるとき神さまの頭が引っ
かかる困るから今は小さな注連縄なのだと教えてくれた。翌12日の映像をみたら、ま
た大きいものに変えられており、なかなか芸が細かい。こちらの小さな注連縄でも1.5
トンもあるそうだ。

さて修造なった本殿は囲いの中にあるので足元は見えないが、天にそびえている部
分は新しくなった檜皮が美しい。先がとがった千木(ちぎ)、これは男神さまを示して
いる、そして3本の鰹木(かつおぎ)、遠いのでよくわからないがとうぜんこれらも新しくな
ったのだろう。

すっくと天に向かって
立つ姿は、日本中のど
の社殿よりも立派だ。

大国主神が高天原の
使者に出雲の国を、天
照大神の一族に譲ると
言った時に、条件として
立派な出雲大社を立て
ることを約束させたとい
うが、その約束は今も守ら
れているのだ。

後に伊勢神宮の新社
殿を見たが、出雲大社
の方がはるかに立派で
神々しいと私は感じた。



■ 雲太 は出雲太郎のこと

町の各所で「雲太、和二、京三」という文字を見た。出雲太郎、すなわち出雲が一番という言葉の縮めたのだ。省略語は今の若者の特徴ではなく、昔からあったのだ。平安時代の建築物のビッグ3を順にならべたもので、雲太が一番、二番は大和の大仏、三番は京の大極殿の順だった。大仏殿は45m あるから、雲太はそれ以上で、48m はあったと言われていた。今の社殿は高さは24.4m だから、48m というのは倍の高さ。「そりゃ、いくらなんでも大きすぎるよ」

と誰もが思っていたが、なんと平成12年に境内から3本の柱を金輪で束ねた柱の根本が発掘された。これは大社の宮司で出雲国造の千家(せんげ)さんに伝わる図面にある古代神殿の配置図の場所だ。この太さがあれば48m の建物を建てることは可能だと、大林組の技術者がシミュレーションした。言い伝えはウソではなかった。

出雲は神話の世界と思われていたが、後で述べる荒神谷(こうじんだに) 青銅器の遺跡、西谷の奇妙な墳墓丘、出雲大社の巨大な柱など考古学的材料が大量に見つかり、古代出雲は大勢力を持った地域であったことが実証されつつある。

出雲は単に現在の出雲地方だけでなく、石見や因幡、さらに越の国など日本海側から吉備など瀬戸内側、近江、大和に広がっていたと考えるべきだろう。

単純に言えば

西日本＝古代出雲 だったのだ。

西日本＝出雲、石見、因幡、越、筑紫、吉備、近江、大和

■ 3-3 荒神谷遺跡・西谷墳丘墓は驚き

同行の山崎さんとは十数年前から一緒に旅をさせていただいている。取材の旅もあったがいつも寄り道ばかり。今回も最初から出雲大社に来たわけではない。山崎さんの車で、出雲大社を目指して出雲ロマン街道を走り出したところで、「荒神谷は見た？」

と言われる。レクチャーを受けながら遺跡に行った。

▲ 荒神谷遺跡の青銅器の剣

1984 年に弥生時代の「銅剣」が 358 本、16 本の銅矛、6 個の銅鐸が出土した。日本史上の重要な発見だというから、吉野ヶ里、原の辻などの遺跡のような規模があるのかと思っていたら、山の斜面に埋められていた跡だけだ。しかしこれ以前に日本で発見された銅剣は 300 本だったから、一か所でそれ以上が見つかったのだから驚きだった。これら青銅器は国宝になった。



この山間の地は青銅器を埋めて隠した場所で、まわりに集落などはまったく見つかっていない。この近くで製造されたいが、製作場所も、だれが造ったかもまったく分かっていない。

しかし出雲には近畿、北九州に匹敵する文化があったことは、現実だったのだ。

▲加茂岩倉遺跡の銅鐸

荒神谷からは歩いて行ける距離にこの遺跡はある。発見は荒神谷のあと 12 年たった 1996 年。こちらには銅剣はなく、「銅鐸」(どうたく)が 39 個も発見されている。それまでは近畿圏で発見された 14 個が最高だったので、これも国宝になっている。

高校の歴史教科書では、「銅鐸」は近畿を中心とした文化圏、「銅剣、銅矛」は北九州文化圏と区分していた。しかし荒神谷、加茂岩倉遺跡からは大量の銅剣、銅鐸が一緒に出てきており、近畿文化圏、北九州文化圏の区分は疑わしいものになった。私は出雲文化圏で統一した方がいいのではと思っている。

■ 八岐大蛇は鉄剣を持っていた

出雲神話はただのつくり話だとされてきたが、これらの遺跡の発見で古代出雲はとんでもなく大きな国だったということが実証されたのだ。

「そうか、大国主神はこれら青銅器文化を背景に出雲の国を支配していたのだ」
私は出雲王国の巨大さの要因はこの青銅器文化だと結論付けて納得する。

しかし青銅器の剣は鉄の剣よりも弱い。高度な武器を持つ勢力が、その地を支配するのは歴史上の必然。出雲の山々にはたくさんの鉄を作るたたら製鉄の跡が残っている。いまでも「安来鋼」として高品位の鉄が作られている。

世界史の教科書には石器時代から青銅器時代、鉄器時代と順に変化していくとあったが、日本では青銅器と鉄器は同時代に伝わっており、鉄を持った人々が青銅器を持った人々を駆逐したという構図はどうも成り立たないようだ。

出雲の背後の中国山地には「たたら製鉄」の跡がたくさん残っている。斐伊川は、スサノオが退治した八つの頭と十指を持つヤマタノオロチの流した血で赤く染まっている、と神話にはあるが、それは「たたら製鉄」による「鉄穴流し」(かんながし)の跡だと言う。酸化鉄とは「赤さび」のことで川が赤く染まるように見えるという。

ということは出雲スサノオは青銅器剣のグループだったが、八岐大蛇の鉄剣グループをだまし討ちによって駆逐して、自身は鉄剣グループに変身した。……と私は思っている。





■ 西谷墳丘墓

遺跡群をまわって再び車で大社に向かうも、斐伊川を渡ったところでまたもや寄り道。そこにはとても珍しい古墳があった。

大和、河内や吉備で見なれた円墳や前方後円墳ではなく、上部が平らで方形、さらに四隅に耳がついた不思議な形だ。「四隅突出型弥生墳丘墓」というそうだ。整備された古墳群に

登ってみると眼下に高校のグラウンドが見える。

9号墓が一番大きくて60×50m、高さが5mもある。2号墓、3号墓は復元がなされふき石が張られており、上ることも、玄室へ入ることもできる。

出雲の大王・首長の墓と推定できるが、内部は完全に盗掘されているので、どんな人が眠っていたかはわからない。もしかすると出雲国造の墓だったかもしれない。

大国主命、スサノオの神は祀られている神さま、祀っているたのは征服者の天孫系大和の出雲国造である千家(せんげ)さんだ。千家さんは、現在84代、2002年に国造職を継いだという。今でも出雲国造家は継続している。その長男が2014年10月5日高円宮の次女の典子さんと結婚された。

墳墓の内部の様子や、ガラスなどほんの少し残された遺物からは、埋葬者は相当な高いくらい的人物だったろうと推定されている。3号墓と4号墓からは大量の土器類が見つかっている。弥生時代後期「吉備産」の特殊土器が発掘されており、2世紀末から3世紀にかけて築造されたことが分かっている。

2世紀から3世紀といえば・・・

「景初三年(239年)卑弥呼、初めて難升米らを中国の魏に派遣。魏から親魏倭王の仮の金印と銅鏡100枚を与えられる」

と史実にあるヒミコのちょっと前の時代だ。

三輪山のふもとの巻向(まきむく)の箸墓(はしはか)古墳(ヒミコの墓?)などは3世紀に作られたものだから、出雲の古墳の方がちょっと古いことになる。巻向のヤマトの文化はここ出雲から出たものだという可能性はある。

まだるっこしい。なんでどの古墳の中に文字の記録が残っていないのだろう。しかし、まあ後世の人にとっては「空白の世紀」などという謎解きの楽しみができたのだからよかったかも。何もかも分ったら神話などできない。

■ 3-4 大国主神、各地で浮気。奥さん激怒！

大国主神は因幡の白うさぎの予言通りヤガミヒメと結婚する。しかしその後スサノオの娘のスセリヒメとも結婚し、スセリヒメが正妻になる。ヤガミヒメは正妻の嫉妬に嫌気がさして、子どもを置いて因幡に帰ってしまう。

大国主神はこの二人だけでなく多くの奥さんをめとる。これはギリシャ神のゼウス様と同じで、各地の有力者と姻戚関係を結ぶことによって、支配を広げていくということだから、不道德だなどと目くじらを立てることではない。

私はこの奥さんの一人がヒミコではないかと思当をつけたのだが、どうもここ出雲ではヒミコに匹敵するヒメには出会わなかった。

■ 大国主命の美人奥さん達

▲ ヌナカワヒメ

ヌナカワヒメは越の国、今の糸魚川市あたりに住むヒメで、たいへん賢いと評判の女性だった。出雲からはたいへん離れているが、大国主神はそこまでしばしば通っていた。その時は八千矛神(ヤチホコの神)という名前で歌を交わし、思いを遂げて妻にする。糸魚川市は姫川の河口にある街でヒスイの産地として知られている。糸魚川という川はないが、姫川はもちろん超美人だったヌナカワヒメの名をとったものだ。

大国主神はヌナカワヒメを妻にしてこの地を出雲の支配下に入れた。ヒメとのあいだに生まれたのがタケミナカタで、この武将が大国主の国譲りに唯一反対した。しかし天孫一族に敗れたタケミナカタは出雲から逃げ出し、ヌナカワヒメに匿われたあと姫川に沿ってさかのぼり諏訪の地に居を構えることになる。

▲ タギリヒメ

大国主神は、さらに九州の筑紫の国にも出かけていく。そこにはまた美しいタギリヒメが住んでいた。このヒメは宗像三女神の一柱で、弁天さんで有名な市杵島姫のお姉さんということになる。タギリヒメは宗像神社では「田心姫(たごり)神」として沖津宮(おきつみや)に祀られている。

沖津宮は九州本土から 60 キロ離れた玄界灘に浮かぶ小さな島だが、古代祭祀跡が残り、遺物は国宝・重要文化財に指定されている。島は海の正倉院と称され、世界遺産にという動きもある。

この島には宗像神社の神官が交代で滞在しており、無人島ではない。

女人禁制、男も通常は入ることはできな



< 宗像三女神: 沖津宮にはタギリヒメが祀られている >

い。私は大島にある宗像神社の中津宮までは行ったが、もちろん沖津宮には参ったことはない。

ところで宗像三女神はスサノオの娘で、大国主神の正妻のスセリヒメとは母違い(?)の姉妹ということになる。大国主命とタギリヒメとの間にできた子どもはアジスキタカネヒコとシタデルヒメ(下照姫)だ。アジスキタカネヒコは鴨の大神といい、葛城の高鴨神社の祭神になっている。

私はだいぶ前に山口県の防府から厚狭(あさ)まで走ったことがある。その時に周防大橋の近くに阿知須(あじす)という JR 宇部線の駅があることを知った。マラソンの神、エチオピアのアベベのふるさとがアジスアベバだったことを思いだした。阿知須の由来はもちろんアジスアベバではないが、アジスキタカネヒコであることは可能性がある。当時何も確かめなかったが、北九州、長門のあたりも大国主神の勢力下にあったことを物語るかもしれない。

■ スセリヒメ、大国主命の大和行きを引きとめる

古事記には、大国主命の恋愛シーンは「神語の歌」として歌われている。私は脳みそがほとんど筋肉になっているので、機微というものがわからない。大国主命の歌も実はよくわからない。

「あなたは黒い着物や青い着物をていねいに整えてくれたが、どうも似合わないので脱ぎ捨てよう。今度は白い着物を整えてくれたが、これは大変よろしい。私が仲間と一緒に大和へ行っても泣いたりしないとあなたは言うが、あなたのうなだれて泣く吐息は朝の霧となって立つだろう」

スセリヒメは歌を返した。

「大国主の命よ、あなたは男だからあちらこちらに若草のような妻を持っているでしょうが、私はあなた以外に男はいません。どうぞ私の玉のような手を枕にして安らかにお眠りください。さあお酒を召し上がれ」

と言って、大国主命の大和行きをとどめる。

ということは大国主命はしばしば大和の国にも行き来していたことがわかる。大国主命は各地に妻を持っていた。すなわち多くの国、大和も葛城も越も筑紫も支配下にあったことを意味している。しかしある時から、大和にはいけなくなったのだろう。

■ 大国主命の仲間

大国主命と一緒に国を作ったのは次の神さまたちだ。

▼ 少彦名命(すくなひこなみこと)：

大国主命は各地に奥さんを持っただけで支配地を広げていったわけではなく、協力者も多くあった。最初の協力者は、大国主命が美保岬にいた時に海のかなたから、小さな舟でやって来たのが少彦名(すくなひこな)命である。最初は名前がわからなかったが、山田の案山子(かみむす)神の子ともだ

という。この神さまに聞いたところ、彼は小さいので神産巢日神の指の間から漏れ落ちてた子どもだったと答えられた。この小さい神さまは一寸法師のモデルだ。この小さな神さまと一緒に国づくりをしたのだが、まだ国の統一が完成しないうちにどういいうわけか分からないが少彦名命は常世の国に行ってしまった。

▼ 大物主命(おおものぬし)

途方に暮れた大国主命のところに光り輝いた神がやってきて、「私を大和の三輪山に祀るならばあなたと共に国造りをしよう」と言った。

「この神が今も三輪山の頂きにおられる神である」

と古事記には書いてあるのだが、「大物主命」とは書いていない。

日本書紀には大物主とあるが、これは大国主命の別名とされている。

私は「物」という文字から物部氏の祖先ではないかと推測している。石見の国の一宮は物部神社だ。ここが物部氏の出身地で大物主命と隣国の出雲の大国主命とが協力して大和まで広がる大出雲連合を造ったのではないか。物部氏は天孫系政権が大和にできた時、出雲から離れ、そちらに協力し大勢力を持った。山の辺の道にある石上神宮は物部氏が天孫系の「布都御魂剣(ふつのみたま)」を守った武器庫であったといわれている。そう言えば「石上」も石見に通じるのでは、と想像は広がる。

▼ コトシロヌシ(事代主命・言代主命)

島根半島の東の先端に美保岬があり、美保神社がある。ここに祀られているのが大国主命の息子のコトシロヌシである。大国主命と共に国をつくり、最後には高天原の神さまに国譲りを承知する神だ。別名七福神の「えびす」さん。釣好きの神さまということになっている。ちなみに大国主命は文字から大黒さん。

出雲の国譲りの時には、もう一人の息子のタケミナカタと違って、あっさり降参してしまう。ところが国譲りの後に事代主神は大和の葛城にあらわれる。天皇家の系図を見ると神武天皇から三代安寧天皇の皇后はみな事代主命の娘、孫である。国譲りでは、出雲の裏切り者であるが後の支配者のもとでもいい地位を得るなかなかの策のある神さまだ。葛城の賀茂氏が信奉した神で、奈良県御所の鴨都波八重事代主神社に祭られる。別名一言主の神だ。





天の使者が国譲りを強要しに来た時、事代主は美保の関に魚釣りに出かけていた。そこへ伊奈西波岐命（イナセハギ）が伝令として伝えに行く。コトシロヌシはタケミカヅチにあっさりと「わかりました、この国はアマテラスの御子に奉りましょう」と言って、船を青葉の柴垣に変えてその中

に隠れてしまった。どうしてそんな簡単に降参してしまったのかはわからない。

■ 美保神社(上の写真)＝逆だった！右が男神、左が女神！

美保神社は出雲大社と同じく大しめ縄がかけられた大社造り。3本の鰹木と千木が高々と天に向かって立っている。出雲の国の神社はどれも妻入りで高い階段、太い掘っ立て柱が特徴的な作りになっている。

拝殿前で素晴らしさに感動して、裏側に回ると、あれれ！本殿は2殿が並列しているのだ。コトシロヌシとミホツ姫の社殿が並列している。同じような形だが千木は縦削と横削になっているので男女の神が並んでいることがわかる。

ミホツ姫はオオクニヌシの奥さん。コトシロヌシはオオクニヌシの息子だが母親はミホツ姫ではない。なんで義母と並んで祀られているのか、なんかあやしい感じだ。

ところで美保関は大昔、国引きによって最後に引っ張ってこられた土地だ。日御碕とは違って能登から引っ張ってきたことになっている。杭は大山、引っ張った綱は米子空港がある弓ヶ浜の砂州である。

美保の港はいい港で、昔は隠岐の船待ちの港、その後も北前船の港だった。元弘の乱（鎌倉幕府倒幕計画）で隠岐に流された後醍醐天皇の行在所もここ仏谷寺にあった。ついでにこの寺には八百屋お七の恋人の吉三の墓もある。どんな経緯があつてここになってきたのか、これも不明。

■ 3-5 出雲大社はスサノオを祀っていた？

出雲大社は大国主命を祀る神社である。これは自明のことである。しかし出雲地方を歩くと大国主命由来の神社は案外少ない。前述の「意宇（おう）」地方の神社はイザナミ、スサノオを祀っている。大国主命の色は薄く、スサノオの色濃い地域だと感じる。

出雲大社にお参りした後に聞いたのだが、本殿には江戸時代まではスサノオが祀られていたという。これはさまざまな文献にあるそう。現在スサノオ神は裏手の素鷲社(すがしや)に祀られている。

ということは大国主命はそれまでどこにいたのだろうか？ もとものの主祭神は大国主命だったが、平安時代以後神仏習合になり、神宮寺である鰐淵寺が主導して主祭神をスサノオに変えたそう。その後江戸時代末に神社側の巻き返して再び大国主命に変え、スサノオには奥宮の素鷲社に移っていただいたという。

「主祭神を替えるなんて、そんなバカな」

と思うが、大国主命とスサノオは同じ神という認識もあって、それほど不思議がられることもなかった。

さらに出雲大社という名前も古いものではなく、江戸時代までは「杵築大社」と呼ばれていた。出雲大社の宮司は天孫系の子孫といわれる出雲国造の千家(せんげ)家と北島家が担っていた。ということは出雲大社はもともと出雲系の神社ではなく、天孫・大和系の支社としての役割を負っている神社だということになる。

少しわかったことは、出雲王国は大国主命の時代からヒミコの時代まで大勢力を誇り、西日本から近畿圏までひろく支配していたが、そのあと九州から来た天孫系によって大和が奪われ、本家の出雲も支配された。大和勢力の力によって巨大な杵築大社が築かれ、天孫系から派遣された出雲国造が実質支配をしていた。

彼らは出雲の大国主命との約束どおり立派な大社を築き、祭神は前の支配者の大国主神を祀った。

しかし出雲の地方の大部分の神社は、国を譲った大国主命よりも、国を造ってくれたスサノオに恩義を感じ、スサノオを祭神にしたのだろう。スサノオは追放されたとはいえ、もとは天孫系の神さまだ。国を譲ったあとの出雲では、自分らを見捨てた大国主命よりも、現支配者の神さまである天孫系の方を大事にしたのではなかろうか。スサノオの名前が多いのは、きっとそんな意味があるのだろう。



■ 3-6 大国主命の国譲り

スサノオと大国主命が造った出雲の国は豊葦原の瑞穂の国になった。高天原にいる神々は「ここはなかなかいい場所なので、譲りうけよう」と都合のよい作戦を画策した。何回か使者を送って、天の神さまに譲るように伝えた。日本の神さまは全知全能ではなく、交渉で物事を決めていたようだ。天からの使者はことごとく大国主命側に寝返ってしまった。このあたりの物語は古事記に詳しい。

しかし天の神さまはあきらめず、最も強いタケミカズチを使者として送り込んだ。かなわないと思った大国主命は、息子の事代主命に後を託した。事代主命は「分かりました」と言って、船をひっくり返して海に沈んだ。もう一人の息子は使者に戦いを挑んだが簡単に負けて糸魚川にいた母のヌナカワヒメのところに逃げ、さらにフォッサマグナを南下して諏訪湖に居を構え、許しを乞うた。

二人の息子が了承したので、大国主命は出雲に巨大な社を作ってくれることを条件にして姿を消した。天の神さまはこれを了承し、のちに雲太とよばれるほどの巨大な神殿を作った。これが出雲大社の元の社である。48mもの高さの神殿だったことは最近の調査で裏付けられている。

まあ相手が強そうだから、条件付けで国を譲ったのだろうが、それにしてもだらしないというか、ちょっとずるい。事代主命はその後天の神さまに重用されて、大和の国で羽ぶりもよくなる。日本国の初代天皇から3代天皇までの奥さんはみな事代主命の娘と孫なのだから。当主の大国主命は超巨大神殿を立ててもらって、奥さんらと一緒に祀られ、いまでも伊勢の大神様と並ぶほどの大社になっている。また諏訪に逃げた次男もその後は全国に諏訪神社が立てられるほどに復権した。

国譲りというのは何だったのか。大国主命の出雲から大和の国が、高天原の軍勢によって撃ち負かされたという史実が、神話という形で残ったのだろう。しかし譲ったはずの大国主命一族はそのまま存続し、高天原の大將の天照大神の孫は出雲に降臨す



ることはできなくて、辺境の高千穂の峰に下りてくる。そこから 4 代後の子孫が艱難辛苦して大和に登ってくる。天照おばあさまの約束があったのに、豊葦原瑞穂の国はそう簡単には天孫の一族にはなびいてくれなかったということなのだろう。

▲日御碕神社

出雲大社に詣でたあと、日御碕に向かった。道は海岸沿いの危うい場所に付けられている。昔はここを通るのは無理で、峠



越えの道を行ったはずだ。その道は猪目洞窟遺跡(＝黄泉津比良坂?)を通して、鷺浦(さぎうら)にでる道だろう。鷺浦には伊奈西波岐命(イナセハギ)の神社がある。イナセハギは国譲りの時に、美保岬で魚釣りをしていたコシロヌシに伝言を伝えに行った神さま。イナセハギは「否どうか答えよ」という意味らしい。この神さまの話をもっと聞きたかったのだが、元郵便局の喫茶店がお休みだったので、社殿を眺めただけにして先に進んだ。

さて、日御碕神社。日本海を望む高台に立つ日御碕灯台の近くに立つ朱塗りの神社だ。出雲の神社はほとんど大社造りで「すつく」と立っており、キンキラの朱塗りで、平入りの神社はほとんどない。しかしこの神社はキンキラ朱塗りの神社だ。高台の上の宮と下の宮の 2 社にわかれており、下の本社には出雲には珍しく「天照大神」が祀られている。別名「日沈宮」(沈は「沉」と書く)で、伊勢の日昇宮…そんな呼び名があるのか不明…に対してはいる。

上の宮は「神の宮」でここにはスサノオが祀られている。姉の天照大神と乱暴者の弟スサノオは高天原で大ゲンカし、スサノオは追放された。この二柱が一緒に祀られている神社はあまりない。おそらく大和が出雲を征服した時に、神さまも移住させたのだろう。しかし地元の意地で、もとの神さまを上、天孫系を下においた。大和の役人もこんな僻地の神社がどうなっているかは実際に訪れたことはなかったので、そんなことは分からなかったのだろう。

なかなか象徴的な神社で気に入った。できれば日が沈むまでここで過ごしたかったが、それでは出雲大社の遷宮祭り中継を見ることができない。山崎さんは車を宍道湖畔に進め出雲のすばらしい夕景を見せてくれた。

出雲は日が沈むのが似合う土地だった。松江の宿にもどり、テレビで遷宮の中継を見た。

■ 日が沈む・・・仏教的

五木寛之の「下山の思想」(岩波新書)の中に

「

と書かれている。日沈宮というのは仏教的概念なのか・・・

本日一緒にいただいた山崎先生は実はお坊さんだ。宍道湖の夕日を見せて下さったのだ。ありがたいこと！

ところで、スサノオは高天原を追放され、娘婿の大国主命と一緒に出雲の国をつくった。姉の天照大神はスサノオを追放したが、出雲の国が豊かになったので孫のニニギ命にその国を支配させようと考え、大国主命に「出雲の国を譲ってくれ」と頼んだ。なぜ豊かなはずの「高天原」から、かわいい孫を「さわがしい」出雲に派遣しなければならなかったのか。

天照大神が豊葦原瑞穂の国を手に入れたいと望んだのは、高天原があまり豊かではなかったということなのだろう。そのために豊かな領土をどんどん広げていかなければならなかったのだろう。

さらに、なぜ自分の子どもをやらずに、孫を派遣したのだろうか。それも不思議なことだ。でもまあ「天孫系」というのだから、ごちゃごちゃ言うことないか。

せっかく出雲に行ったが、わからないいろいろ出てきた。その中で最大の謎は、出雲をのっとった天孫系の勢力のふるさとしてある「高天原」に行ってみたくなった。というのが高天原はどこにあるのだろう。

次回は高天原からのレポートをするつもりですが、まずどこへ行こうか??



<朝日に拍手を打つのが神道で、西に沈む夕日に合掌するのが仏教である>